

くすりばこ はいちやく  
薬箱 (配置薬・置き薬)

かぜ薬 【昭和30年代】



ダルマは寝てもすぐに起き上がるため、かぜ薬などの図柄によく使われている。

岡崎むかし館 蔵

薬箱 (配置薬入れ) 【昭和前期】



三星家庭薬 (富山県富山市) と和田製薬 (奈良県御所市) の「配置薬」の薬箱。富山県や奈良県は伝統的に薬産業が盛んな地域である。

岡崎むかし館 蔵

9月9日は語呂あわせで、キューとキューで救急の日です。皆さんの家には救急箱＝薬箱がありますか？昭和30年代頃までは、行商による売薬さんの「配置薬」が多くの家庭で利用されていました。この「配置薬」は売薬さんが用意した専用の箱に薬を入れて各家庭に備え置き、次に売薬さんが来訪した時に、使った分だけ代金を支払い、古くなった薬を取替え、新しい薬を補充するシステムです。「配置薬」の補充に売薬さんが来ると、子どもに紙風船などのお土産をくれたそうです

この「配置薬」のシステムは江戸時代に始まりました。昭和前期の「配置薬」の薬箱は、引き出しタイプで存在を主張する赤色、取扱店や薬の広告など記されたものが多く、戦後は物資不足でボール紙製になります。この「配置薬」の薬箱も、今では昭和時代を語る道具の一つです。

現在も「配置薬」は行われていますが、車の普及や大型ドラッグストアの台頭で薬も購入しやすくなり、また共働きなどで日中の留守家庭増加による家庭訪問の対応困難など、社会情勢の変化により、以前に比べて利用する家庭も減っているようです。

薬箱に薬があることの安心感は今も昔も変わらないと思いますが、お医者にかかるのも、薬を手に入れるのも大変な時代では、<sup>たいどう</sup> 応急手当の薬が入った薬箱はまさに救急箱として家族の健康管理にかかせない存在であったといえます。

